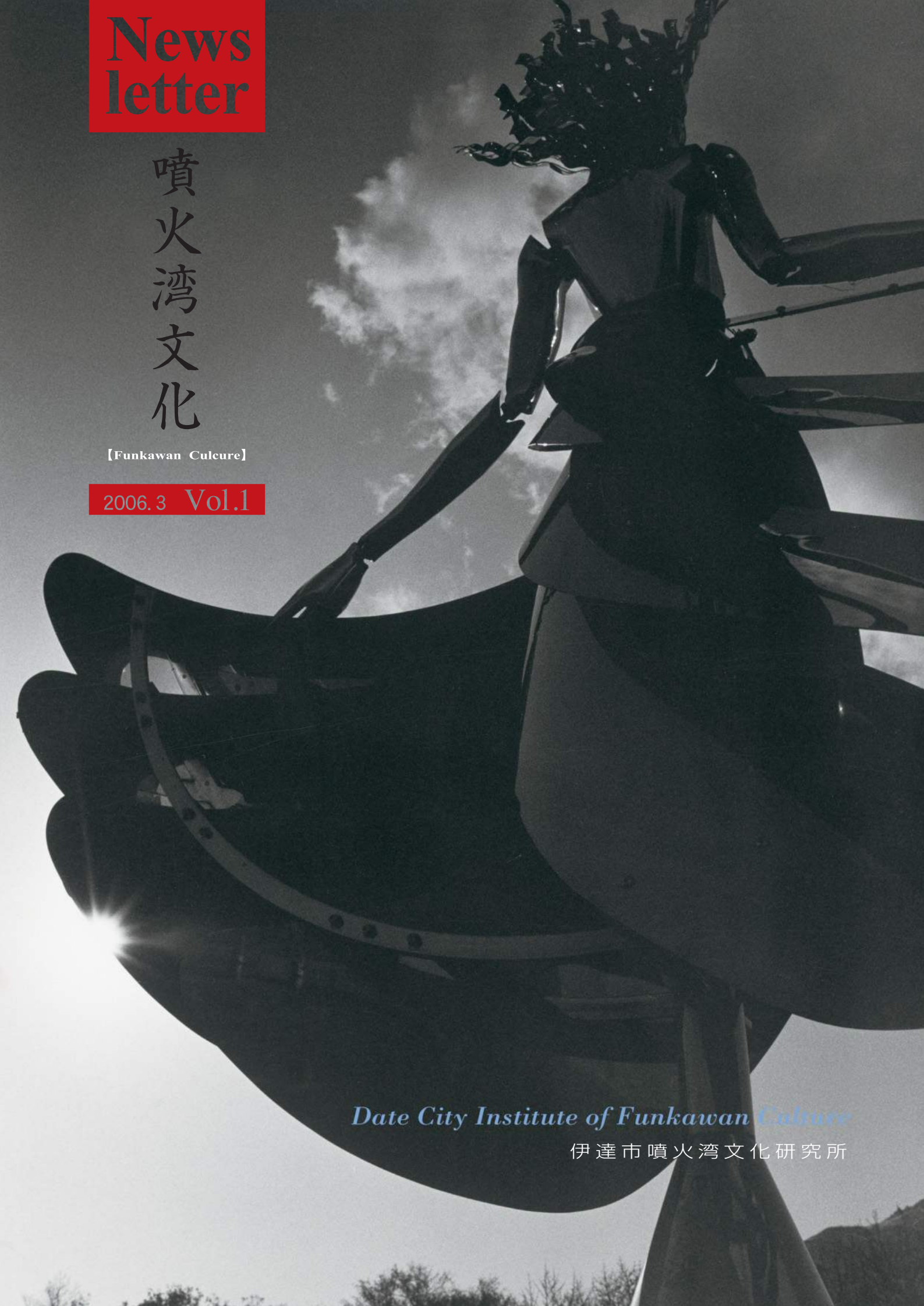




News
letter

噴火湾文化

【Funkawan Culcure】

2006.3 Vol.1

Date City Institute of Funkawan Culcure

伊達市噴火湾文化研究所

■趣旨説明・活動報告

「噴火湾文化研究所の目指すもの」

伊達市噴火湾文化研究所長 大島 直行 …………… 3

■インタビュー「*Fieldworker*」

【服飾・保存修復】「能装束の修復」

北星学園大学名誉教授 福山 和子 …………… 4

■研究発表要旨

【考古】「縄文晩期～続縄文時代の琥珀製玉類の流通」

伊達市噴火湾文化研究所学芸員 青野 友哉 …………… 6

■資料紹介

【歴史】「伊達の画家・小野潭^{ふかし}の絵画資料について」

伊達市噴火湾文化研究所学芸員 黒田 格男 …………… 8

■コラム

【音楽】「モーツァルトのこと」

指揮者/新国立劇場特任講師 中田 昌樹 ……………14

■新収蔵資料

【博物館】「噴火湾文化研究所の資料収蔵と活用について」

伊達市噴火湾文化研究所学芸員補 伊達 元成 ……………15

■研究スタッフ紹介・2005年度研究業績一覧・次号予告 ……………16

表 紙

「漣舞 *RIPPLES DANCE*」 作：せき まさし

撮影・解説：栗 島 暁 浩

モノクロームの写真に魅せられ、洞爺湖周辺地域を日々ファインダー越しに切り取っている。湖畔には「生の賛歌」をテーマにした58基の作品からなる洞爺湖ぐるっと彫刻公園があり、写欲をそそる。特に目を引く「漣舞ーリップルダンス」(作：せき まさし)は、羽を広げた女性をイメージさせる巧みな造形に惹かれる。敢えて逆光を選びメタリックな質感を抑え、シルエットとなって浮かぶ後ろ姿の豊かなラインと飛翔感にこだわった。ローキーなトーンの中に煌めく陽光がアクセントとなった。

噴火湾文化研究所の目指すもの

所 長 大島 直行



早いもので、あっという間にこの1年が過ぎました。昨年の今頃、研究所の設立準備で走り回っていたのがつい昨日のことのように思い出されます。

さて、このたび研究所のニューズレターを創刊することになりましたが、刊行にあたり、研究所の目指すものが何かを述べておきたいと思います。

私が伊達市の文化を手がけるようになって10年になります。その間、多くの時間を文化財の保護に費やしてきました。お陰様で史跡北黄金貝塚の公園整備や民俗資料、古文書の整理などを行なうことができました。

一方、文化財を単に保存するだけでは、市民の皆さんに文化財を護ることの意義はなかなか伝わらないと考え、積極的な活用策を考えるようになりました。この10年間、さまざまな活用事業を行ないましたが、何といても最大の取り組みは、縄文によるまちおこしを合言葉に行なった「縄文フェスタ」でした。

官民協働で行なったこの取り組みがきっかけで、市民の皆さんの中に、伊達の文化をもっと知ることが必要だという気運が出てきました。伊達市には縄文文化だけでなくアイヌ文化や武家文化、さらには近代の芸術文化など様々な文化があることがわかってきました。

現代の伊達の文化は、古い文化の伝統の上に作られていること、そして、伊達のまちの「伊達らしさ」をつくっているのは、こうした伊達の文化の積み重ねだということに気づいた時、このまちの文化財や現代の芸術文化などいわゆる文化遺産を調査・研究し発信する組織が必要だということになったのです。伊達市噴火湾文化研究所はこうして生まれました。

研究所は2つの理念を掲げて設立されました。一つは、「まちづくり資源としての文化」の掘り起こしに力を注ぐということです。

伊達市には、北黄金貝塚に代表される縄文文化や有珠モシリ遺跡に代表される続縄文文化、そして有珠湾の沿岸に繰り広げられた中・近世のアイヌ文化など、噴火湾の豊かな自然に育まれた独特な文化があります。また、近代の巨匠伊達家主従の移住も、現代の私たちの生活も、噴火湾に面したこの土地と

切っても切れない関係にあります。

私たちは、これまで、こうした先人が残した文化遺産を「文化財」と呼んできました。しかし、この10年間、これらの文化財は、単なる歴史資料や教育資料としてだけでなく、縄文フェスタの開催や文化財ボランティア団体の設立、学会の誘致など「まちづくり資源」として機能してきました。

私たちはこれから、伊達の文化遺産やそうした遺産の伝統の上に培われた現代の文化を「噴火湾文化」と呼ぶこととし、「まちづくりのためのあらたな資源」としての噴火湾文化の価値をおおいにアピールすることにします。

二つ目の理念は、「環境と文化の調和」を図ることに力を注ぐということです。

縄文文化やアイヌ文化が示すように、噴火湾文化の大きな特質は、「環境と文化の調和」にあります。この「環境と文化の調和」は、現在、わが国はもちろん世界が直面しているきわめて重要な問題であり、伊達市においても、明日のまちづくりを考えるにあたって、避けては通れない大きな課題です。

私たちは、先人の文化遺産からそのことを学び、そして、それを明日のまちづくりに活かしたいと思っています。噴火湾文化研究所は、言うなれば「環境と文化の調和を目指すためのまちづくり機関」です。

従来、こうした取り組みはコンサルタント会社に任せてきました。しかし、これは、まちづくりの根幹をなす重要な課題であり、私たち市民が日常的に考えてゆかなければならない問題です。ですから、研究所はそのために知恵を絞りたいと思います。

伊達市噴火湾文化研究所は、文化に関わる市町村立の研究所としては、おそらく全国で最初の組織ではないかと思っています。そして、私たちが、誇りに思うのは、設立と同時に、市民の皆さんが参画して、研究所の支援組織「かけはしの会」（堅田進会長）を設立して下さったことです。まちづくり機関としての研究所が、設立当初より、市民とともに作り上げていく体制になったことを心強く思います。

これから、さまざまな問題に直面するかもしれませんが、ひとつひとつ乗り越え、全国に向かって噴火湾地域の文化を発信できるよう、頑張りたいと思います。



■ふくやま・かずこ

前北星大学短期大学部長。名誉教授。1939年3月生まれ。東北芸術工科大学大学院修了。札幌市在住。著書：「学生のための被服構成洋裁Ⅰ」他。北海道服飾文化史や染織文化財に関する論文多数。

噴火湾をフィールドとして活躍する研究者に最新の研究状況と地域への熱い思いを語ってもらう「Fieldworker」。研究者の人となりとともに、研究を通して育まれた、土地と人との結びつきについて紹介します。

第一回目は染織文化財の保存修復の専門家、福山和子先生です。先生は伊達市開拓記念館所蔵の能装束をボランティアで修復してくださっています。能装束の文化財的価値や研究を志されたきっかけなどについて伺いました。

◆ 現在、先生が修復されている能装束についてご説明頂けますか？

資料そのものは能装束で『鬼女』^{おにおんな}といわれる役をする人が腰に着付けた舞台衣装です。

素材は絹で、表面は光沢があり、刺繍で丸紋が散らしてあります。織物自体の構造は、縦糸は撚りがかかっていますが横糸は撚りがない「練貫」^{ねりぬき}という平織です。一見、縹子織に見えますが、これは室町時代から江戸時代にかけてよく織られていました。

次に模様を見ると、摺箔と刺繍丸紋が全体に配されているという特徴があります。これは江戸中期から後期にかけて、特に後期に多いものです。

制作年代についてよく聞かれるのですが、これらのことからいいますと、江戸中期から後期のものとするのが一番穏当な考え方だと思います。

◆ 普通の着物と能装束の違いは？

能も発生の頃は一般の小袖と変わりはありませんでしたが、歴史を重ねるにつれて伝統的で絢爛豪華になっていきますね。ですから、普通の着物と比べると身幅が広く、衿幅が広く、衿が長い、前下りが長く前が下がっているという特徴があります。装う時に腰から上をゆったり着るために必然的に前の丈が必要になったのだと思われます。

◆ 注目される点はどこですか？

北海道の服飾文化史上、移住武士集団が持ち込んだものとして、さらには能装束として残されていることはもちろん、織の技術、刺繍の方法、家紋の付

け方等々すべてがその時代の工業、美意識を知る手がかりとして貴重です。私にとりましてもダイヤモンドより宝物です。

また、染織文化財の保存修復の目から見ると「劣化が進んでいる点」が注目されます。これは天然染料を落ち着かせるために鉄あるいはアルミの媒染剤が使われています。そのため、その媒染剤の影響で繊維を傷めています。この「痛み具合」を見るのはとても良い資料なのです。つまり、何百年も時間を経ると繊維がどうなるのかを知ることができるのです。

ちなみに国内外の報告書では多くの類例があります。それは150～200年前に世界的に流行したからです。鉄媒染は色が綺麗に出て光沢が増す、色に重みと厚みが出るという効果があるのでよく使われました。それが今ではどの資料も劣化が進み、粉状になっているのです。

◆ 模様からわかることはありますか？

亙理伊達家の家紋の三引両紋が衿の後ろの中心に付いています。もし、紋が入っていなければ収集品や下げ渡し品等と考えられます。けれども、衿に家紋があるということは、伊達家の人が何らかの意思を持って準備したのでしょう。それがどんな意志かはわかりません。ただ、武士の世界はいつでも生と死が背中合わせです。もしかすると時代精神を引き継ぐために能を一つの道具として用いた、あるいは意思決定の際に用いたのかも知れません。伊達家の人たちの凄烈な武士の精神を感じます。



◆ もともと「服飾」が専門ということですが、「保存修復」の分野を志されたきっかけは？

偶然です（笑）。私が奉職し始めた時、教員はなんでもさせられました。服飾美学、服飾史、デザイン、被服衛生・生理学などを担当させられました。おかげで総合的に服と人間の関係を見られるようになったわけです。

もう一つは、これまで学生には「地域の人とともに生きなさい」と懇々と言い続けてきましたが、いざ自分が定年退職を控えて「自分は地域の人に何が出来るか」と考えると、何もなかったのです。学生に言った手前もあり、服飾に関して何か出来ないかということで、若い頃お世話になった地域の博物館や文化財の役に立ちたいと・・・。

お叱りを受けそうですが、以前から、染織品は文化財の中で低い扱いを受けていると感じていました。だんだん劣化して、次の世代の人たちに本物を見せることが出来なくなる。複製品ではなく、『オーセンティシティな物を見せられない』というのが気になっていました。そこで、保存修復について考えるようになったのです。

しかし、私に修理する技術があったとしても、保存修復の哲学や分析方法を知らない。そこで改めて勉強しなおそうと大学院に行きました。

大学院では保存修復に関する理論と実践を通して、その精神を教わりました。中でも、心に残っていることは、『修復することが劣化を進めることだ』ということ。それを認識した上で修復の方法を考えるべきだということです。

◆ 伊達で修復作業をされるのはなぜですか？

一つは、伊達にはこれまでお世話になりました。昭和50～60年代に色々な資料を見せていただき、研究の資料とさせていただきます。

伊達には全国的に見ても貴重な服飾文化史資料がたくさんあり、伊達家であるために保存されてきたということがあります。本州では資料が散逸している例が多いのです。当主も周囲の人にもこれらを大切にしたいという意思があったのだと思います。

もう一つは、ここの研究所の人たちの姿勢があります（笑）。いつも市民の方を向いている。『文化財を市民のためにどう活用しようか』と常に口にしていて。それに賛同している市民の方々もボランティアをしたり、一緒に考えている。まちぐるみのエネルギーを感じます。染織文化財の保存修復者を育てようという心意気も感じます。

それに、ここの居心地が良いもので…。お蕎麦もご馳走になりますし（笑）。ともあれ、能装束を粉

にせずに次の世代に残したいと思って来ています。

◆ 先生にとってのフィールドとは何ですか？

私にとりましては現場で実証するということです。知識や分析結果、研究、技術は物に対して点でしかない。フィールドワークによって、その点を駆使することで、線や面になります。私はフィールドワークを重視しています。現地で見ないものとは言えません。私にとってフィールドは科学で分析されたことを現地で証明するということです。



◆ 話は変わりますが、ご趣味は？

一番苦手な質問です（笑）。若い頃は山登り、スポーツでした。いまは無芸小食（笑）。しいて言えば、旅。組み立てられたものではなくて、フツと行く。例えば駅で一番早く来た列車に1～2時間乗って行き、その町でコーヒーを飲んで、街並みを見たり、図書館へ行ったりして帰るんです。よくやりました。今はあまり出来なくなりましたが…。

あと、ジグソーパズルが好きです。限定された中で、訳がわからないものを組み立てるのがいいですね。

◆ 最後になりますが、今後の目標あるいは夢は？

染織文化財の保存修復センターが、日本の各ブロックにあればいいと願っています。種々の危機管理や修復の相談に応えられる所で、分析機器が常備されていたら理想です。そんな施設ができるよう働きかけたいです。

道も市町村も文化に対してお金をかけるという発想になるには時間がかかるんですね。お金には替えられませんが、市民が育つとか心豊かになるということは一番の財産だと思います。例えば、小学生がそういう文化的知識を持って自分のまちで育つ。そしてそのまちで誇りを持って住み、起業して、そのまちで生活して、子供を育てていく。そういうことがまちの発展につながるという思想がないわけですね。

その辺のところから掘り起こしをしないとなあ、と思っています。

ありがとうございました。益々のご活躍を期待しております。

縄文晩期～続縄文時代の琥珀製玉類の流通

伊達市噴火湾文化研究所学芸員 青野 友哉

2005年7月9日に北海道大学で開催された日本文化財科学会第22回大会での発表要旨に加筆修正したものを掲載します。

琥珀製玉類は北海道の縄文時代晩期から続縄文時代前期（約3,000～1,700年前）の墓から大量に出土します。当時は玉を連ねてネックレスのようにして使っていましたが、単なるアクセサリとしてではなく、限られた人が儀式などの際に付けることができた祭祀道具的な威信材と考えられています。

噴火湾沿岸での出土例は少なく、伊達市有珠モシリ遺跡で17点出土している程度です。これは琥珀製玉類を大量に使用する文化圏が道東北部から道央部にかけての地域であり、噴火湾沿岸や渡島半島は玉の志向が異なる地域だったことによるものです。

本研究は、異なる祭祀道具で、異なる儀礼を行う集団が隣り合っていた続縄文文化社会を復元するという目標に先立ち、玉類の分布やサイズの変化から流通経路を把握するという基礎的研究です。

なお、本発表は、大会長でもある北海道大学の小笠原正明教授の特別講演「化学分析による遺跡出土アスファルト等の産地推定」を受け、琥珀原産地の問題を化学と考古学の双方から言及しようと企画されたもので、私は考古学的立場から発表しました。

■はじめに

琥珀製玉類に関する研究は玉自体の形態分類及び分布域の明示から始まり（松下1968、1982、寺村1985、北沢1985）、原産地と供給源について言及したもの（杉浦1994）や、副葬形態や碧玉製管玉との分布域の違いから玉類の持つ性格について言及したもの（青野1999）まで様々である。しかし、その中で必ず問題となるのがこれらの流通と原産地についての問題である。本発表では原産地については明らかにできないまでも、近年の発掘成果を参照しつつ、縄文晩期から続縄文時代の琥珀製玉類の流通について述べたい。

方法としては、多様な形態を持つ琥珀製玉類の中で、大量生産品である平玉に着目し、それが出現す

る時期と地域、その技術的背景（貝製平玉製作技術の導入）を明らかにする。同時に琥珀製平玉の分布、出土量、サイズを時期ごとに把握し、流通経路及び原産地の解明を目指す。

■分析方法

続縄文時代前期を1期～6期に分け、縄文時代晩期と併せて7時期に区分する。遺構に伴って出土した琥珀製玉類の時期ごとの分布図と出土数、平玉の直径（図1・表1）を示し、変化の傾向を把握する。対象範囲は青森県及び北海道であるが、時期不明の分布にはサハリンも含めている。

次に、平玉の断面形を観察し、側面に丸みを持つものと「端正な角を持つ方形」（木下1998）のものを分類する（写真1）。これらは製作技術の違いを表すため、技術変化の時期を知ることができる。また、貝製平玉と琥珀製平玉の時期別分布を示すことにより、貝製から琥珀製へ材質転換が起こったことと、その後も分布域を異にしながら共存することを明らかにする。併せて、原石・未成品・製作具等が出土した製作址の可能性を持つ例を示す。

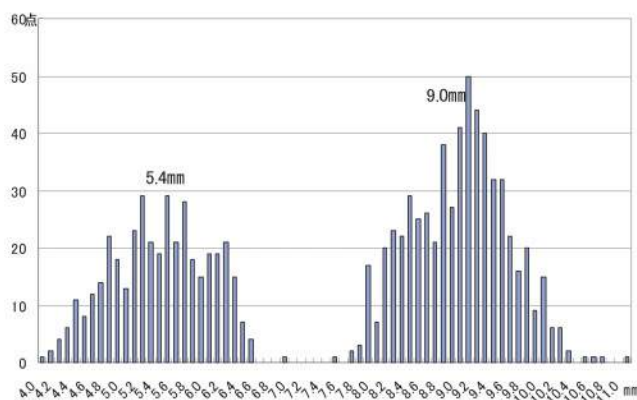


図1 琥珀製平玉の直径計測グラフ（常呂川河口遺跡470墓）

常呂川河口遺跡470墓に副葬された平玉の直径別の点数をグラフにすると、二つの山が現れた。これは平均5.4mmと平均9.0mmのサイズ別に製作されたことを示している。一つの山裾の幅は紐に連ねて回転研磨した際の誤差と考えられるが、見た目には差は感じられない。

各遺跡において同様の分析をし、便宜的に分類したのが表1である。

表1 琥珀製平玉のサイズ分類

小 型	平均	4mm	〔概ね3.2～4.5mm〕
中 型	平均	6mm	〔概ね4.6～7.0mm〕
大 型	平均	9mm	〔概ね7.1～11.0mm〕
特大型	平均	13mm	〔概ね11.1～15.0mm〕

■結果

1. 縄文晩期の玉の形態は、釧路市幣舞遺跡の平玉以外、側面に丸みを持つ平玉か垂飾であるが、続縄文1期以降は断面形が方形となる玉が主体となり、複数個を紐あるいは棒状のもので連ね、回転研磨して製作されたことを示す。この技術は北海道の縄文後期以降の貝製平玉製作に用いられたものであり（木下1998）、縄文晩期に幣舞遺跡第3号貝塚にて貝製と琥珀製の平玉が共存することからも、琥珀製平玉は貝製平玉の製作技術の応用により作られたものと考えられる。
2. 回転研磨技術によって作られた琥珀製平玉は縄文晩期に釧路地方に存在し、石狩川流域でも遅くとも1期には出現している。その後、分布域は拡大し、3期に最も広くなる。琥珀製玉類の主な分布域は余市町と伊達市を結んだライン以東からサハリン南部地域までである。
3. 平玉の直径は1期には小型・中型のみだが、2期には大型が、3期には特大型が現れる。以後、5期まで特大・大・中・小の各タイプが用いられている。出土量は2期から3期に激増し、3期をピークに減り続け、5期を最後に消滅する。

■結論

回転研磨技術による琥珀製平玉の大量生産の開始は、縄文晩期から続縄文1期に道央・道東部で強烈な琥珀志向が始まったという点で画期といえる。これは晩期以前の琥珀製玉類が蛇紋岩等の他の石材と混在して連ねられていたことと併せて考えても大きな違いといえる。さらに、ヒスイなど本州に主な給源地を持つ材質から転換した点も注目される。

また、2期から3期の出土量の増加と分布圏の拡大、さらに大型・特大型平玉の出現は、より広範囲に需要が拡大したことを示す。推測として、大量に大きな原石を確保できる原産地の発見や製品の流通経路の変化などが背景としてあった可能性も考えられる。

原産地については、出土遺跡の分布から、石狩低



写真1 断面が「丸みを持つもの」(左)と「端正な角を持つ方形」(右)の琥珀製平玉(常呂川河口遺跡)

複数個を紐(棒)で連ねて研磨するとサイズが揃うとともに断面が方形になる。大量生産を目的としたことがわかる。

地帯以東、サハリン南部以南にあることは指摘できる。これは、現在可能性が指摘されている岩手県(久慈)、北海道、サハリンのうち、渡島半島での出土例及び出土量の少なさから岩手県産である可能性はかなり低いからである。また、渡島半島から岩手県にかけては貝製平玉及び碧玉製管玉が流通しており、玉への志向が異なる文化圏と捉えることができる。

製作地については未成品や原石とともに製作道具が出土している例もあることから、北海道内にも製作址がある可能性がある。仮にサハリンからの琥珀の流入が想定されとしても、すべてが製品のまま流入していたわけではないと思われる。

■課題

考古学的手法により、さらに原産地を限定することは現段階では不可能である。また、流通時の形態が原石か製品かという問題も残っている。推測としては産炭地帯であり、かつ琥珀原石や製作道具、石炭玉が出土した遺跡の周辺(釧路地方・胆振地方東部・石狩川流域)に原産地があり、それぞれの地域で加工・利用していた可能性がある。また、杉浦が指摘する南サハリンのスタロドゥップスコエ海岸(旧日本名 栄浜)も存在する(杉浦1994)。確かに、琥珀製平玉の集中地域である石狩川流域と網走地方・釧路地方は、多少前後するものの平玉の規格の変化や出土量の変化はほぼ連動しており、サハリンからこれらの地域に製品の状態で搬入された、との仮説も成り立つかもしれない。しかし、これは現段階での推測であり、問題を解決するためには道北部及びサハリンの琥珀製玉類の形態と製作技術、年代を明らかにする必要がある。

伊達の画家・小野潭^{ふかし}の絵画資料について

伊達市噴火湾文化研究所学芸員 黒田 格男

今から130年前、北の湘南・伊達で一人の画家が生まれました。名を小野潭^{ふかし}といいます。農業を営むかたわら絵を描き続け、76年の生涯の中で数多くの作品を残しました。

特に亘理伊達家の移住を描いた作品は見事であり、80号程の大きさと統一された厚紙の隅々にまで、当時の情景を克明に描写しています。また、移住期の作品以外にも、風刺画や風俗画などユニークな作品が数多く残されています。

ここでは、所在の判明している小野潭の作品を彼の生い立ちと共に紹介し、その資料的価値を明らかにしたいと思います。

また、この資料紹介の執筆にあたり、小野潭の末女である太細アイ氏、並びに孫の太細重秋氏にご協力頂きました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

■はじめに

北海道伊達市は、全国でも数少ない武士団移住の歴史を持つ街である。その歴史の大半は、古文書や古記録などといった「文字」資料によって後世に伝えられてきた。しかし下の『第一回移住者、室蘭に上陸』（写真1）のように、「絵画」によって先人の労苦を後世に伝えた者がいた。その名を小野潭という。

小野は、明治9年（1876）伊達市弄月町に生まれている。独学で日本画や彫刻を修め、76年の生涯の中で数多くの作品を残した。中でも亘理伊達家主従の集団移住を主題とした「開拓絵画」シリーズは秀逸である。小野以外に武士団移住を主題として扱っ



写真1 『第一回移住者、室蘭に上陸（1）』 (No.11)

た画家は存在するが、彼ほど多くの作品を残した者はいない。

ここでは、所在が判明している小野の絵画資料を紹介するとともに、作品が持つ資料的価値を明らかにしたい。

■初期（明治末）

小野は24歳で結婚するも、結婚4年目には日露戦争に従軍することとなり、妻と子どもを残して戦地へ赴いた。戦地において、小野は家族に自分の無事を伝えるため、戦地の風景や軍服姿の自分を葉書などに描いては伊達に送っていた。これが、小野の画家としての最初の一步である。

しかし従軍中であったため、筆はともかく絵具の調達は困難であった。そこで小野がとった手法は、雑草の汁や土、灰を水に溶いたものなどを絵具として使用するというものであった。この手法は小野の作品に一貫して見られ、濃淡や発色の具合などは水彩絵具そのものである。

この時期の作品は多数あったとされているが、現存するものは今のところ見つかっていない。

■中期（大正時代）

小野は日露戦争から帰還した後、分家ながらも諸事情により本家を引き継ぐこととなった。これ以後、農家と画家の二足の草鞋を履いて制作に励むこととなる。

この頃の小野の作品は大きく2つに分けられる。

1つは、社会や世相への批評などといった、いわゆる「風刺画」である。『自由民主主義略説』（写真2）のように、余白部分に自らの主張を書き込んで知人に配っていたと伝えられている。

もう1つは、庶民の生活の様子や習慣を描いた「風俗画」である。こちらも「風刺画」と同様、文字を余白に書き入れているが、「風俗画」の場合は、一部の例外を除いて五七調が基本になっている（写真3）。

●小野潭作絵画資料

【中期（大正時代）】



No. 2 『時代の変り (2)』



No. 3 『組合風刺 (1)』



No. 4 『組合風刺 (2)』



No. 5 『組合風刺 (3)』



No. 6 『組合風刺 (4)』



No. 7 『組合風刺 (5)』

【晩期（昭和初期）】



No. 10 『支配地検分』



No. 12 『第一回移住者、室蘭に上陸 (2)』



No. 15 『開拓地の区割りと宅地を定める』



No. 16 『漁業の調査』



No. 17 『東久世長官の視察』



No. 18 『ケプロンの視察』



No. 19 『我が国初の甜菜精糖所』



No. 20 『西洋農具の導入』



No. 21 『二十周年式典』



No. 23 『相撲奨励』



No. 24 『美名 (1)』



No. 25 『美名 (2)』



No. 26 『政策風刺』



No. 27 『かぶ』



No. 28 『星露』



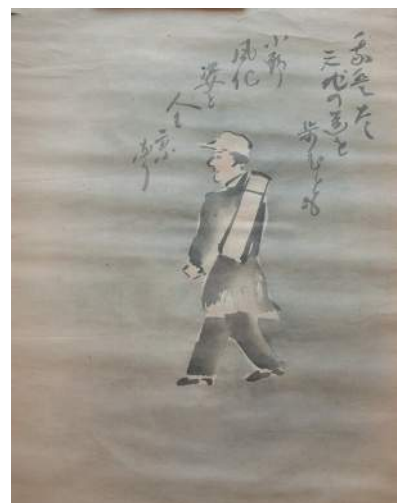
No. 29 『阿呆駄羅教』



No. 30 『民主化略説』



No. 31 『豊・近衛兵』



No. 32 『自画像』



No. 33 『有珠山と羊蹄山』



No. 34 『旭湯の女』



No. 35 『風呂は極楽 (1)』



No. 36 『風呂は極楽 (2)』

表1 小野渾作絵画資料一覧

No.	題名	年代	サイズ(縦×横)	備考
1	時代の移ろい(1)	大正時代	38cm×54cm	中期(大正時代)
2	時代の移ろい(2)	大正時代	54cm×38cm	中期(大正時代)
3	組合風刺(1)	大正時代	33cm×24cm	中期(大正時代)
4	組合風刺(2)	大正時代	33cm×24cm	中期(大正時代)
5	組合風刺(3)	大正時代	33cm×24cm	中期(大正時代)
6	組合風刺(4)	大正時代	33cm×24cm	中期(大正時代)
7	組合風刺(5)	大正時代	33cm×24cm	中期(大正時代)
8	自由民主主義略説	大正時代	79cm×47cm	中期(大正時代)
9	有珠に到着	昭和初期	75cm×160cm	開拓絵画シリーズ
10	支配地検分	昭和初期	55cm×78cm	開拓絵画シリーズ
11	第一回移住者、室蘭に上陸(1)	昭和初期	75cm×160cm	開拓絵画シリーズ
12	第一回移住者、室蘭に上陸(2)	昭和初期	75cm×160cm	開拓絵画シリーズ
13	貞操院のはげまし(1)	昭和初期	75cm×160cm	開拓絵画シリーズ
14	貞操院のはげまし(2)	昭和初期	75cm×160cm	開拓絵画シリーズ
15	開拓地の区割りと宅地を定める	昭和初期	75cm×160cm	開拓絵画シリーズ
16	漁業の調査	昭和初期	75cm×160cm	開拓絵画シリーズ
17	東久世長官の視察	昭和初期	75cm×160cm	開拓絵画シリーズ
18	ケプロンの視察	昭和初期	75cm×160cm	開拓絵画シリーズ
19	我が国初の甜菜精糖所	昭和初期	75cm×160cm	開拓絵画シリーズ
20	西洋農具の導入	昭和初期	75cm×160cm	開拓絵画シリーズ
21	二十周年式典	昭和初期	75cm×160cm	開拓絵画シリーズ
22	開拓二十年祭	昭和初期	75cm×160cm	開拓絵画シリーズ
23	相撲奨励	昭和初期	40cm×52cm	晩期(昭和初期)
24	美名(1)	昭和24年	38cm×54cm	晩期(昭和初期)
25	美名(2)	昭和初期	55cm×56cm	晩期(昭和初期)
26	政策風刺	昭和初期	54cm×79cm	晩期(昭和初期)
27	かぶ	昭和初期	59cm×30cm	晩期(昭和初期)
28	星露	昭和初期	54cm×39cm	晩期(昭和初期)
29	阿呆駄羅教	昭和初期	54cm×39cm	晩期(昭和初期)
30	民主化略説	昭和初期	54cm×38cm	晩期(昭和初期)
31	豊・近衛兵	昭和初期	38cm×27cm	晩期(昭和初期)
32	自画像	昭和初期	54cm×38cm	晩期(昭和初期)
33	有珠山と羊蹄山	昭和初期	38cm×54cm	晩期(昭和初期)
34	旭湯の女	昭和初期	80cm×36cm	晩期(昭和初期)
35	風呂は極楽(1)	昭和初期	38cm×54cm	晩期(昭和初期)
36	風呂は極楽(2)	昭和初期	54cm×38cm	晩期(昭和初期)
37	戦後の復興	昭和26年	40cm×160cm	晩期(昭和初期)
38	アイヌ人の生活と熊	昭和27年	55cm×78cm	アイヌ絵
39	アイヌ人の生活	昭和27年	55cm×78cm	アイヌ絵

※題名は伊達市噴火湾文化研究所による



写真2 『自由民主主義略説』(No.8)



写真4 『有珠に到着』(No.9)



写真5 『開拓二十年祭』(No.22)



写真3 『時代の移ろい (1)』(No.1)



写真6 『アイヌ人の生活と熊』(No.38)

この時期の作品の特徴としては、全体的に暗い背景を施していることが挙げられる。中には全く背景を描かないものもあるが、作品中の人物は表情豊かにそれぞれの感情を表している。

■晩期（昭和初期）

50歳を過ぎた頃、小野は家業を長男に譲り、自らは画家に専念した。

この頃の伊達は「村」から「町」になり、鉄道も敷設されるなど、近代化が急速に進んでいた。その反面、先人の移住の苦労が忘れられていく危機感を感じていた小野は、亘理伊達家主従の集団移住を題材にした作品に着手する決意を固めた。これが「開拓絵画」シリーズである。

この「開拓絵画」シリーズは、移住地の事前調査である『有珠に到着』（写真4）から『二十年祭』（写真5）までの、四半世紀に及ぶ亘理伊達家の移住の足跡を描いたものである。そのパターンは40種類と伝えられているが、現在は12種類14点が判明しているのみである。いずれも、縦75cm、横160cmの厚紙に移住の歴史の1ページをそのまま再現しており、中には100人以上もの人物が描かれている大作も存在する。

また、小野はこの時期にも「風刺画」や「風俗画」を描いている。中でもアイヌ民族を描いた作品は貴重であり、『アイヌ人の生活と熊』（写真6）のように、一人一人の感情が見て取れるほどの臨場感がある。



写真7 『貞操院のはげまし (1)』 (No. 13)



写真8 『貞操院のはげまし (2)』 (No. 14)

■絵画の持つ意味（まとめにかえて）

小野の絵画資料が持つ意味は、大きく3点挙げられる。

1つは、移住期の伊達の歴史を後世に伝えるという、明治期の歴史資料としての価値である。

小野は「開拓絵画」シリーズにおいて、馬や人物などの「型紙」を作り、これらを用いて同じ題材の絵を何枚も複製していた。そのため、写真7、写真8の『貞操院のはげまし』のように類似した作品が存在する。これは、出来得る限り多くの人に伊達開拓の歴史を正確に伝えたいという、小野の強い思いの表れであると考えられる。

その結果、移住から100年以上経過した現在においても、小野の作品は亘理伊達家主従2,700人の当時の苦労を我々に思い起こさせてくれる。この点において、小野の絵画資料はどの文字資料や民俗資料よりも優れている。

次に挙げられるのは伊達の民俗資料としての価値である。小野の作品には、服装や農具などといった有形の民俗資料が描かれているだけでなく、当時の生活習慣や、『戦後の復興』（写真9）の余白に書き込まれているように、歌詞などといった、後世に伝



写真9 『戦後の復興』 (No. 37)



写真10 『アイヌ人の生活』 (No. 39)

えられにくい無形の民俗資料も描かれている。この点において、小野の絵画資料は、当時の伊達の風俗を知る貴重な民俗資料とも言えるのである。

最後に挙げられるのは、伊達のアイヌ資料としての価値である。アイヌ民族を主題として描いた画家は、蠣崎波響をはじめとして、平澤屏山、小玉貞良などが著名であるが、伊達の一画家が描いていたことは全く知られていない。

現在確認されている、アイヌ民族を主題とした小野の作品は、『アイヌ人の生活と熊』（写真6）と『アイヌ人の生活』（写真10）の2種類のみであるが、有珠・虻田のアイヌ民族を描いた、貴重な資料である。

以上のように小野の絵画資料は多岐に渡る上、どの作品も資料的価値が非常に高い。しかし、伊達市内において未発見の作品がある可能性は否定できない。今後は、これら未発見の作品の所有状況を、伊達市内外問わず把握するとともに、これらの保存・活用をはかることが今後の課題である。

参考文献

小野潭伊達開拓歴史画保存会, 1992: 樹海を拓く。

■コラム
【音楽】

「モーツァルトのこと」

指揮者／新国立劇場特任講師 中田 昌樹



今年は、モーツァルト生誕二百五十年。この類稀な“超”天才の逸話には枚挙の暇がありません。さらに、その晩年の貧困ぶりや死因に至っては、毒殺説が有力視されたり若干誇張され過ぎている傾向も否めません。

数年前公開された映画「アマデウス」に登場する、ライヴァルの宮廷作曲家アントーニオ・サリエリが、モーツァルトを毒殺した、という説を展開していました。（出生記録簿によれば、モーツァルトのフルネームは、“ヨアンネス・クリュゾストムス・ヴォルフガングス・テオフィールス・モーツァルト”。“アマデウス”はギリシャ語の“テオフィールス”をラテン語読みにしたもの。一般に“ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト”と名乗っていた）

「アマデウス」をはじめ舞台用の戯曲として発表した原作者、ピーター・シェーファーは、映画化に際し、「この映画はフィクションであり、モーツァルトの伝記映画ではない！」と“お断り”を入れたにもかかわらず、一般には、この毒殺説がより信じ込まれる結果となりました。

もっとも、この説は当時かなり有力で、ロシアの作曲家リムスキー＝コルサコフも件の題材でオペラを作曲しており、「あっ、毒入りのワインを、彼は飲んでしまった！」と言う台詞を語らせているほどです。

しかし、もし毒を盛るとしたら、サリエリのほかにもその動機を持つものは他にもいます。

まずは、もっとも身近な存在、妻コンスタンツェ。夫モーツァルトの財政が逼迫しているというのに、湯治に行きっぱなしで、まさに湯水の如くお金を使い、そのお金を

モーツァルトから届けに来た弟子のジスマイヤーとどうやら怪しい関係になり、モーツァルトが「そこでの行動を慎むように！」という手紙を妻に書いているくらいですから……。 （ジスマイヤーの名誉のために一言。モーツァルトが未完に終わった最後の作品「レクイエム」を補筆完成させたのは、このジスマイヤーです！）

さて、その死因ですが、葬儀をしたウィーンの聖ステファン寺院の死亡台帳には“急性粟粒疹熱”とあり、専属作曲家をしていた宮廷は“心臓水腫”と発表し、ウィーン大学医学部教授グルテナー博士は“リュエマチ性炎症熱”という説を唱えています。

これらの症状に共通するのは、“身体のむくみ”で、誰がどう見ても自然死ではない、と思ったのでしょうか。

さらには、葬儀当日、参列者は埋葬場所まで行かず、墓地の入り口で戻ってきてしまったため、モーツァルトがどこに葬られたか分からなくなってしまいました。でもこれは、最も賢い証拠隠滅方法でもあります。何せ、掘り返して調べるわけには行かないわけですから……。ただ、その参列者の中にはサリエリもいたのですから、ちょっと話は複雑になりますが、ね。

もし、仮に墓石があったとしても“墓石を破壊しては、いけませんよ”。



噴火湾文化研究所の資料収蔵と活用について

伊達市噴火湾文化研究所学芸員補 伊達 元成

■文化財資料を活用するために

噴火湾文化研究所の活動の一つに「調査・研究」があります。対象は埋蔵文化財やアイヌ文化財、武家文化財、民俗文化財、さらには絵画や彫刻などの芸術作品までも含みます。研究所では先史文化から現代の生活文化までの推移を理解し、それらをまちづくりに活かすための調査・研究を行っています。

すでに、約4万点を超える埋蔵文化財、2千点を超える武家、民俗文化財を保有している研究所では、平成17年度から効率的な調査研究を行うために、これらの資料をデジタルデータベース化する事業を始めています。現在は研究所支援組織「かけはしの会」のメンバーがボランティアで、大量のデータをパソコンに入力する作業を行っています(写真1)。

研究所が所有する資料のうち、埋蔵文化財以外のほとんどの資料は市民の皆さんからの寄贈によるものです。今年度も市民の皆様からたくさんの寄贈資料がありました(表1)。中には、今では製造されていない農機具が動体の状態で寄贈されたものや、開拓時代の様子をうかがい知ることのできる、古文書などの歴史資料がありました。また、おもしろいものでは、昭和58年に当時小学2年生の児童が、北黄金貝塚で見つけた土器や石器を調べた自由研究の作品もありました。

新たに収蔵された資料は、一点ごとに、状態の確認や計測、写真撮影やクリーニングを経て収蔵庫に収められます。研究所の収蔵庫は、元スタジオの施設

を利用しているため天井が高く、専用の出入口と平積みできる棚が設置され、大型で重量のあるものまで収蔵することができます。しかし、手狭なため、収納方法も課題となっています。

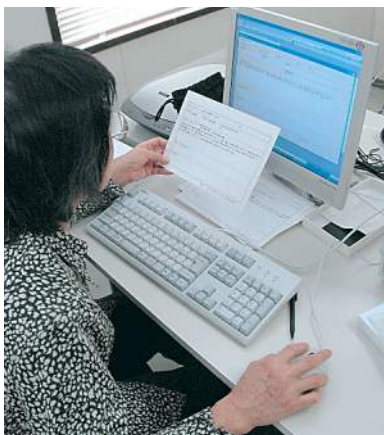


写真1 パソコンへのデータ入力

表1 2005年度新収蔵資料一覧

収蔵資料名	個数・詳細等
絵画	油絵・100号
図書資料	255冊 文庫本・雑誌等
古文書資料	75冊
アップライトピアノ	NORDHEIMER社製
茶箱	1点
茶箱	2点
桐箆笥	1棹
桐箆笥	2棹
農機具	全29点 唐箕・馬具等
旧国鉄バス(一部JRバス)用具	全13点 制帽・時計等
古文書・古地図資料	全138点 巨理世臣家譜略記等
S58年の自由研究(土器・石器)	北黄金貝塚を小学2年生が調査

■資料を読み取る

保存環境の違いにより、寄贈された資料の状態はそれぞれ違います。古くなればなるほど劣化していますが、劣化しているからと言って使えない資料となるわけではありません。修復して寿命をのばし、資料としての価値をより高めることができます。また、使用痕や劣化していること自体が重要な資料となることもあります。それらは資料の履歴を知る手がかりになったり、保存科学の分野では修復方法を考えるうえでの重要な資料となったりするのです。

しかし、多くの場合は「古くて使えない」、「何が書いてあるのか読めない」といった理由で貴重な資料が破棄されたり、散逸したりしてしまう場合がほとんどです。資料が無くなるその前に文化財を救出するという“文化財レスキュー”についての機能も研究所には求められます。どうか皆さんのご自宅で古いものを整理していたり、倉庫の解体などで昔のものを見つけたりして、処分するかどうか判断に迷ったときは研究所にご相談ください。大切な地域の文化財保護に役立つ場合があります。

■今後の資料活用

データベースが本格的に稼働することで、寄贈資料の受入態勢や、活用がよりスムーズになり、市民の皆様は地域史の勉強などに積極的に利用していただけるようになります。歴史ある資料を気軽に手にすることで、郷土を愛する気持ちがもっと強くなるように、今後も活動を続けてまいります。

●研究スタッフ紹介

当研究所のスタッフを紹介します。所長以下、文化財課と調査研究課の2課があります。



大島直行

所長

念願の文化研究所が開設して1年。調査・研究成果の蓄積が楽しみです。



加藤 篤

文化財課長

文化財行政1年目ですが、伊達市の豊富な文化資源を活用できる環境づくりに努めております。



仁木行彦

文化財課文化財係長

文化財全般の事務を担当していますが文化的素養と知識の欠落により、研究所の発展に貢献できないのが悩みです。



谷口邦男

調査研究課調査研究係長

噴火湾の豊かな文化資源を調査研究し、地域の発展に少しでも貢献できればと思っております。



浅見嘉昭

調査研究課調査研究係

ホームページの制作を担当しています。また、HP内の「デジタルアーとギャラリー」に関わる調査研究を行います。



青野友哉

文化財係・学芸員

主に埋蔵文化財保護の事前協議や発掘調査、史跡北黄金貝塚公園での体験学習などを担当します。専門は考古学。



黒田格男

文化財係・学芸員

近代資料の調査研究、伊達市開拓記念館の展示や迎賓館の解説などを担当します。専門は文献史学。



伊達元成

学芸員補

「むずかしいをカンタンに」をモットーに様々なデータをデジタル化しています。

●2005年度研究業績一覧

〔著書・論文・資料紹介〕

青野友哉〔共著〕、2005：北海道における縄文文化から続縄文文化への変化、2004是川縄文シンポジウム記録集、東奥日報社。

青野友哉、2005.10：小牧野遺跡出土の続縄文土器について、葛西勲先生還暦記念論文集北奥の考古学、同刊行会。

黒田格男・大島直行・古原敏弘・小川正人 2006.3：伊達市噴火湾文化研究所所蔵ジョン・バチラー関係資料1、北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要.第12号。

〔講演〕

大島直行、2005.10.1：特別講演 北海道の貝塚調査から見たもの、第9回動物考古学研究集会。

大島直行、2005.11.1：縄文文化の智慧に学ぶ水環境の保全、平成17年度下水道環境フォーラム。

〔学会発表〕

青野友哉、2005.4.23：続縄文時代の遺跡立地とその特徴―道央・道南西部、北海道考古学会2005年度研究大会。

青野友哉、2005.7.9：縄文晩期～続縄文時代の琥珀製玉類の流通、日本文化財科学会第22回大会。

青野友哉、2005.10.1：クマ意匠の判断基準について―鹿角製品における彫刻表現の理解から―、第9回動物考古学研究集会。

●第2号予告〔2007年3月刊行予定〕

■インタビュー「Fieldworker」

【人類】東北大学大学院教授 百々幸雄

■画評

【絵画】野呂山芸術村交流員 永山優子

■論評

【火山】北海道大学大学院地球科学科助手
西村裕一

■研究動向

【アイヌ】北海道立アイヌ民族文化研究センター研究課長
古原敏弘

■資料紹介

【歴史】伊達市噴火湾文化研究所学芸員
黒田格男

Newsletter【噴火湾文化】創刊号

●編集・発行 伊達市噴火湾文化研究所

〒052-0031 伊達市館山町21番地5

TEL. 0142-21-5050 FAX. 0142-22-5445

E-mail bunkazai@city.date.hokkaido.jp

URL <http://www.funkawan.net/>

●印刷 (有)フォーユー

〒052-0023 伊達市元町44

TEL. 0142-23-2963 FAX. 0142-25-5790

2006年3月31日発行